

第647回建設技術講習会を富山市で開催

第647回建設技術講習会が、富山市において平成30年10月24日（水）～26日（金）の3日間、「これからの公共事業と建設技術者のあり方」をテーマに、全国から356名の参加を得て開催されました。

講習会初日は、下記の3講演が行われました。

- インフラの整備と経済成長
～全建会員が持つべき知識～
- これからの社会資本マネジメントに関する取り組みについて
- 「安寧の公共学」の取り組み

講習会2日目は、下記の4講演と講習会3日目の現場研修で視察する地域事業の事前紹介が行われました。

- 社会経済システムのイノベーションを創出する道路～社会資本政策の総合戦略とイノベーション～
- 社会資本整備を巡る状況と未来を拓くリーディング・プロジェクト
- i-Constructionの推進について
- 地域事業の紹介 2事業

講習会3日目の現場研修は、244名が参加して「立山カルデラ砂防博物館」、「本宮砂防堰堤」、「富山県美術館（全建賞受賞事業）」、「富山駅付近連続立体交差事業、富山駅周辺土地地区画整理事業、路面電車南北接続事業」について現地で説明を受けました。

また、1日目の講習終了後、恒例となった「参加者同士の交流会・講師との意見交換」を92名の参加をいただいて開催しました。地元協会のご好意により、地元の銘酒と、富山の特産「ます寿司」の食べ比べなどが用意され、盛況のうちに終了となりました。



全建大石会長の講演の様子



現場研修の様子「本宮砂防堰堤」

第648回建設技術講習会を秋田市で開催

第648回建設技術講習会が、秋田市において平成30年11月14日（水）～16日（金）の3日間、「都市行政の課題・河川行政の課題」をテーマに、全国から234名の参加を得て開催されました。

講習会初日は、下記の2講演と講習会3日目の現場

研修で視察する地域事業の事前紹介が行われました。

- まち・ひと・しごと創生のための都市行政の課題
- 激甚化する災害への備えについて
- 地域事業の紹介 2事業

講習会2日目は、都市部門と河川部門の2会場に分かれ、それぞれ下記の講演が行われました。

【都市部門】

- 立地適正化計画制度によるコンパクトなまちづくり
- 地域交通とまちづくりについて
- 都市の防災・減災と復興事前準備について
- 「官民連携まちづくり」のすすめ
- 歴史・景観まちづくりについて

【河川部門】

- ダム事業の最近の取り組みについて
- 河川管理の最近の取り組みについて
- 最近の治水行政について
- 砂防行政に関する最近の話題について
- 水辺とまちの未来創造について

講習会3日目の現場研修は、150名が参加して「秋田市中心市街地活性化基本計画」、「斉内川流域治水対策河川事業」、「大曲通町地区第一種市街地再開発事業」、「雄物川河川激甚災害対策特別緊急事業」について現地で説明を受けました。

また、1日目の講習終了後、ここ秋田でも「参加者同士の交流会・講師との意見交換」を79名の参加をいただいて開催しました。地元協会のご好意により、酒どころ秋田の銘酒のご提供もあり、盛況のうちに終了となりました。



国土交通省 水管理・国土保全局
河川計画課 河川技術調整官
林 雄一郎氏の講演の様子



現場研修の様子
「斉内川 流域治水対策河川事業」

平成30年度 公共工事品質確保技術者更新講習と資格試験が終了しました。

平成30年度公共工事品質確保技術者の更新講習と資格試験が終了しました。

更新講習については、9月7日（金）の東京会場を皮切りに11月16日（金）の福岡会場まで全国10会場で開催され、品確Ⅰは530名、品確Ⅱは951名、合わせて1,481名の方が受講されました。

また、資格試験については、10月6日（土）の

札幌会場を皮切りに11月17日（土）の東京と福岡の両会場まで全国9会場で行われました。平成30年度は、品確Ⅰを79名の方、品確Ⅱについては63名の方、合わせて142名の皆様が受験されています。

なお、試験の結果については、12月に開催される資格認定委員会に諮られて合否が決定され、12月中には全建ホームページで発表するとともに各受験者にお知らせします。

「2019年全建手帳」完売のお礼。

2019年版全建手帳は、今年も会員皆様のご意見を反映させ、さらに使いやすくなるよう大きく改定を行ったところですが、おかげをもちまして完売しました。

皆様のご購入、ありがとうございました。

地方自治体での土木職のなり手不足が、新聞でも取り上げられる状況に。このような厳しい状況の中、全建では全国の技術者が連携・交流し、技術水準と社会的地位の向上を目指しています。

東京都内で配られた平成30年11月9日の読売新聞で、「自治体 土木職求む！」と大きな活字の見出しが目に飛び込んできました。見出しはこれだけでなく、「面接のみ・保護者説明会」と活字を少し小さくして並んでいます。サマリーを読むと、「全国の自治体で土木職が10年間で約2万人も減少するなど、なり手不足が深刻な状況。」とあり、「災害復旧など新たなニーズは増しているが、大規模開発の減少や『きつい』といったイメージの広がりがある」とみられる。」と、この原因を分析しています。

記事の本文には、各地の自治体の取組みとして、「技術職は筆記試験なし・専門知識は入庁後の研修で身に付けることができる。」とか「保護者説明会・

休暇はきちんと取れ、家族との時間を持てるなど、子の地元勤務を希望する親心に訴えた。」などと紹介されています。さらに、「土木系の職員は、災害復旧やインフラの維持管理などに欠かせない存在だが、そうした対応ができないという状態にもなっている。」と、常々我々が危惧している点の指摘もなされています。

このように、土木職のなり手不足とそれに伴うインフラの維持管理に支障が出てきつつあることなどが、新聞でも取り上げられるほど厳しい状況にあります。

全建は、このような厳しい環境に対応するためのお役に立ちたいと考えています。ぜひ、全建をご活用ください。

Dr.クマの“健康のヒント”

アルコールとJカーブ



Jカーブ現象という言葉をご存じだろうか。飲酒量と死亡率にはこの現象があると言われている。横軸に飲酒量、縦軸に死亡率を描いたグラフはJの字を描く、つまり飲酒量が少ない人、中くらいの人、大酒家と死亡率をみると、中くらいの人最低で、大酒家が最高になるという現象だ。このことから適切な量のアルコールは寿命を延ばすと言われてきた。ところが、このJカーブ現象は心臓病、脳梗塞、糖尿病にはあてはまるものの、少なければ少ないほどリスクが低い病気もあることがわかっている。高血圧、脳出血、乳がんなどである。おおむね、〇〇は健康に良い、□□に含まれる△△は体に良い作用が

あるので□□をとるべきだ、という話は眉に唾して聞く方が良い。確かに飲酒量一日約20gで死亡率が最低になるJカーブ現象が見られるが、これはある意味、多数の様々な人達のデータをまとめたためにそのように見えてしまうマジックのようなものかもしれない。私自身、由緒正しい飲んべの家系で育った飲んべえだからよくわかるが、酒飲みは理由をつけて飲みたがるものである。しかし、Jカーブは酒を飲む理由にならない。なにより適量の20gはたったビール中瓶一本、日本酒なら一合、ウイスキーダブル1杯である。こんな量なら飲まない方がましかも。

(北里大学 医学部 教授 熊谷 雄治)